

# 「男になりたい」

金仁均 (キム・インギョン)

## 目次

1. 概要
2. 対話
  2. 1. 暗闇期
  2. 2. 彷徨期
  2. 3. 黎明期
3. 結論
4. 終わりに

### 1. 概要

私にとって、存在としての「私」の正確かつ、緻密な記述・認識・把握は人生のテーマとなっている。一見、自分の意思によって現在の私は成立しているようにも思われるが、存在の100%を常に認識しているとは考えられない。例えば、歩くときに右足を出してから左足を出すとき、頭で左足を出そうと思ってかた足を動かしているとは到底思えない。また、食事中に、複数のおかずの中、何を・どんな順序で・どんな量を・などを一々考えながら食事をする人は多くないだろう。徒歩・食事に関しては、ほぼ無意識状態での、つまり「私」がオフ状態になっていることに対してそれが深刻な問題とは、私は思わない。もちろん、問題としての重要度がゼロではないが、他に優先すべき課題があるからである。私にとって、その優先順位の上位を占めているのは、現時点での私の「肩書き」についてのものである。息子・20代・男・大学院生・韓国人・東京居住人などが私の「肩書き」として挙げられるものである。その中、優先順位を付けてそれに自分なりの答えを出す（または、出そうと努力する）ことが私の存在意義を探る作業につながると、常に意識している。本クラスの初期に提出した「テーマ提出」は、そういう動機を背景にして作成されたものである。以下はその全文である。

### テーマについて

少し考えに変化がありまして、新しいテーマを提出します。

前回のクラスでは「歴史、そして、私の歴史」というテーマとして取り上げましたが、これは大学院での研究動機に当たるものであって、「考えるための日本語7, 8」クラスをフルで実感するためには、別のテーマを設定する必要があると思いました。

新しいテーマは、常に心に存在している、年を重ねるほどその存在感を強くアピールする、「男」についてのものです。タイトルは「男として生きること」にしたいと思っています。

振り返ってみると、私は高校を卒業するまで、自分の「男」については覚醒していませんでした。大学入学後、兵役を迎えて初めて外部の世界が「男」としての資格・義務を私に要求していることに気づき、「男」としての自覚が芽生えたと考えています。そのあと、数人(?)の女性との恋愛経験、長男としての自覚、結婚適齢期突入(?)という幾つかのファクターにより、常に自分の中の「男」について考えさせられ、現在も進行中であります。

対話相手は、去年の来日から2年間交流を続けてきたIさんを有力候補として考えています。Iさんは3年前にJ航空会社で定年退職した60代の男性で、仕事の面においても、結婚・育児・子育てなどの問題においても、豊富な経験の持ち主です。Iさんと信頼関係をもとに「私」の「男」について「私」がどのように考えているのか、じっくり話し合いたいと思っています。

以上です。

ここで、まず対話相手の変更について述べなければならない。私が去年から居住している寮のスタッフであるI氏とは平素から深い交流を持っており、今回の「対話」を契機にさらなる関係の進展が期待できると判断したわけだが、残念ながらI氏は私との対話を拒否した。ここで、「考えるための日本語7・8」クラスの本質ともいえる「考える」行為に直面することとなった。これまでのI氏との関係を振り返り、I氏の人柄や他人に対するスタンスなどを綿密に考慮する必要があるためである。他者との関係において、その関係性は相互性があり、一方の判断のみでは特定しきれないことが「考える」プロセスを通して少し

はわかった気がする。その後、同寮で寮母を務める R 氏に趣旨を尋ねたところ、R 氏の方から私の「私」への関心を示してくれた。まさに、私の周りの人との対話力の不在が露呈された瞬間でもあった。このような経緯を経て、R 氏と 2 回にわたって対話を行った。場所はいつも R 氏と立ち話をするラウンジを選択し、いつもと同じ雰囲気の中で録音許可を得てから対話活動を実施した。詳細記録には入っていないが、R 氏は毎日食堂で寮生と昼食を一緒にすることにしており、数回対話について話す機会があった。以下の会話は、本会の活動の趣旨を R 氏に説明した際の記録の一部である。

私：(中略) 話がもとに戻るけど、男だから、、人間だから人間としての、何かの価値観をつくって、男だからなにかを作って、院生だから院生としての価値観をつくって、それは当然だと思うんですけど、あとは、家族のこと考えると、息子としての自覚を持っていないと、それはコピーかどうかのさらにその前の話だともうんですよ。で、いまの、院生としての、息子としての、やるべきこととか、考えとか、それはコピーではないと思うんですよ。自分のアイデンティティを持っていると思うんですよ。でも、男としては、それがいえませんよね。うぬ、いう必要がないのかとかいうと、なぜ、他のことに対しては言えたはずなのに、男にたいしては言えないのかと思うと不思議ではない。院生としてはいえる、息子としても言える、なのに、男としては私、コピーにすぎないことがわかった。だから、そこはなんとか、答えを出そうと努力してるんですけど、どうやって答えを出したらいいかわからないんですよ。(中略)

このように趣旨を伝えた後、R 氏に「私の意見に納得してもらうための活動ではない」ことを再三強調した。私が望んでいることは、自分について認識している範囲外のことを自力に考えてみるチャンスを得ることであって、自分の思考を相手に押しつけるためではなかったからである。従って、R 氏には私のアイデンティティがより活性化されるように質問・コメントをすることを求めた。議題を立て、互いに意見を出し合うことになると、私が意図した結果には辿りつかないと考えたのである。R 氏もこの意見に賛同してくれた。そして、対話は始まった。

## 2. 対話 (以下、K は筆者、R は対話相手の R 氏)

### 2. 1. 暗闇期

(前略)

K: その中で、僕になにが足りないかという、私にとって男はなにか、そこなんですよ。で、やっぱり、結婚への不安が一番強かったかもしれません。男にならないと結婚できないと自分にプレッシャーをかけてるかもしれません。どう思いますか。やっぱり、男にならないと結婚できないですかね。

R: 男、、なんですか。

K: そうそう、そこがやっぱり難しいです。まあ、物理的に僕は男なんですけど、もちろん、僕はもっと男になりたいんですよね。

R: それは大人じゃない？

K: 男、大人、、同じ、、、

R: 同じ？ イコール？

K: だから、じゃじゃ、男になると大人になるわけではなくて、男だけど、強い男性性、わかりますか、漢字

R: はい

K: を、求めるタイプの間人ですね。僕は。なんか、

R: でも、その男性性とはなんですか

K: だから、、、、そうですね。

R: 文化によって違うか？

K: いや、そこをよくわからないですよ。なぜ、私は、男性を求めるか、とにかく、男にならなきゃいけないというふうに考えてる自分があるんですね。自分の中に。男にならなきゃ、でも、

R: じゃ、どういう人を男だと思うの？

K: で、最初はですね、それが強さへのこだわりがありました。強い人。だから、僕は、その、巨人とかが好きなの理由も、やり方がいくら汚くてもゼンゼン OK です。とにかく、圧倒的な強さ、桁違いの強さを見せてくれるところで、あ、これは、まさに、これは男だな。で、その忍耐強さ。我慢して我慢して、自分がやりたいことを貫ける、その精神力の強さとか、で、今の私にはできない部分、たとえば、毎日30分運動すればいいことは私もわかってるけど、やってないですよ、あと、寝る時間減らして勉強すればいいことをわかってるけど、やってない。あと、なにか、こう、あの、頭にくることがあったりしても、

それが、顔に出さずに、マルく対応すればいいことをわかってるのに、なかなかできない。そういう自分の、なんか、イメージとおりにいかない自分のことを、その反感、

R：うん

K：が、あの、、その、、男っていうイメージに現れてるかもしれません。その強さ、こう、、自分のことをしっかり抑えて、あの、自分が、こう、やらなきゃいけないと思ったら、それに対して、とことん力を出せるタイプ、、に憧れると思うんですよね。それが、これからの自分の人生のなかで、男は、それでいいかということ、それだけではないと思うんですよね、まず。

(後略)

問題意識(「男」を見つけない!)はあるが、その解決に向かって具体的な方法が分からず、悩んでいる段階である。一人称表現に「～かもしれない」が高い頻度で現れていることがその証拠と言えよう。「男」のイメージを求めているが、そのイメージの実態がつかめず、そのギャップで苦悩している姿がうかがえる。また、ブレインストーミング法のように、行き当たりばったりでリソースを排出している様子が見られたのも特徴といえよう。対話活動を通して「考える」ように心がけてはいるが、残念なことに、この段階でKに「考え」は存在していない。その無知を知ることが、本プロセスにおける重要なポイントとなっている。

## 2. 2. 彷徨期

(前略)

R：じゃ、そのパートナーと一緒に強さを求めていくのはだめなの？

K：それいいじゃないですか。でも、

R：結婚するために、男を完成させないといけないということはない？

K：あ、なるほど。じゃ、僕の男はどこにあるんですかね。でも、一応、Rさんの場合は、男を求める必要はないってことですか

R：うん

K：でも、そうすると、その女性性と男性性の区別は物理的なものであって、あんまりこれっていった違いはあるわけではない、結局同じ人間であって、子供を作るための、その反対からDNAを提供するものだけということになりますかね。Rさんの場合は。

R：そのカップルによって、どういう、形をとっていくか、だから、もちろん、男が一般的にいう、男性性を出していく家庭なのか、女の方が、あれもありますよね。

K：そうそうそう。

R：ふむ。

K：たしかに、逆転っていうか、社会通念ですよ。男は、どうであるべきで、女性は女性であるべきとか、

R：そうそう。

K：そう、僕は社会がつくってきたそのイメージにあの、囚われてるかも。でも、その社会が作ってるそのストリームに乗ることも、悪いことではないと思うんですよ。

うむ、..

(中略)

K：でも、子供に対する、おそらく、ないと思うんですけど。子供に対する男女区別は、いま、私が考えてる男性というのは、女性と比べられる男性特有の性質ではなくて、もっと根本的なものだと思ってるんですね。自分の中で、自分が自分であるために、物理的に男といえるから、なにか、答えなきゃいけないと僕は思ってるので、でも、その答えが僕にはまだないんですね。じゃ、だとしたら、もし、私が、女として生まれたとしても、いまの私と同じ人間になってるのか、ただ、ルックスが少し変わってて、人間とし変わってないかという、そうでもないと思うんですね。うむ、..、まあ、その場合は、女性性を求めることになったか、それはさておいて、だから、一応、でも、こうやって答えを出そうとすることは悪くはないと思うんですよ。

R：その答えって、相手が出てくる中で、完成していくんじゃない？

K：じゃ、相手との対話の中で、規定できるもので、一人だけだと、

R：どこにも、出しようがないというか、

K：あああ、確かに、それは相手というのは、女性、

R：そうそう。

K：ある女性とパートナー決めて、その人との関係が前提になってはじめて、自分の男性性も育っていく。最初からなかったらスタートで、ある程度あったら影響を受けながら、

R：もっともっと。

K：どこへ方向に向いていくかはわからないけど、じゃ、ということは、

R：彼女も、エネルギーもわいてくるんじゃない。ぜんぜん違うところから、

K：じゃ、その、なるほど、じゃ、私、いくら、あの、頭を抱えて悩んでも、これが私の男性性だということが相互性があるか、一人の努力では定義できない、永遠に、思考の中でしか、

R：関係の中でしか、あの、意味を、こう、見出すことができないということですかね。それが人間だと思うよ。

(後略)

問題解決のために、ある方向性に辿りついている。それは、女性性との比較によって男性性を割り出すことであった。しかし、その考えは、R氏との話の中で自己否定されることになった。R氏は、聞き役としての役割を演じながら、時にKの意見に疑問を投げたりしている。それを機にKは「男」に関しては自分が、残念なことだが、オリジナリティのないコピーにすぎないと「考える」ようになる。その考えは次の対話でより鮮明になる。

### 2. 3. 黎明期

(前略)

K：あ、確かに、恋愛してた頃のこと思い出すと、恋愛していると、その、男への切実な求め、意欲、こだわりはあんまり感じてなかった気がしなくもないですよ、確かに。ただ、寂しがつるだけってことですかね。男へのこだわりってのは、年末だから、クリスマスだから、寂しがつる、、いや、でも、それもないとはいえないけど、それだけではないですよ、きっと。

R：隣に、いま女性がないことは、自分が男じゃないからとは思ってないでしょう。

K：それはないですよ。作ろうと思うといつでも作れるものだし、う、、、男か、、、行動原理みたいなものですかね、たとえば、ご飯の食べ方、歩き方、考え方、こう、抽象的なものから、具体的なものまで、それを貫く行動原理、それを私は自分の男だと勝手に特定してるかもしれませんね、それが、社会の、その、よくいわれてるイメージ通りにやることに対する、少し抵抗を持ち始めて、悩んでる、かなああと自己診断してますね。

R：社会が求めている男も実は、揺らいできたんじゃない？わからないけど、

K：そうですね、そもそも、実態のないものですから、私が自分のなかに、勝手に、あ、、、勝手に、社会で揺らいでるものを、勝手に特定つけて、それを模倣しようと、となると、

もともとオリジナリティがない社会通念を私が勝手にイメージをつけて、それを従おうとしてる。となると、もともとオリジナリティがなかった社会通念にイメージをつけた段階で、すでに、そこに、私のオリジナリティがあるかもしれないってことですかね。

R：うんうんうん。

K：となると、それに従おうと、模倣しようと思ってる自分のことがコピーではなくて、そこにオリジナリティがあるかもしれない。なぜかという、私が思ってる社会のイメージがあるから、それに従おうとすることは、すでに、私か決めたものだから、そこに私のアイデンティティがあるかもしれない。

R：苦しくないならね。苦しいんだとしたら、囚われてるだけよ。

K：たしかに、社会で言われてる、男は強いとか、それってほんとかっていうと、はい、とも言いきれないですよ。時代の変化があるし、強いといっても、線引きができないもので、で、それを強いイメージを持ってるのを男だというふうに捉えてるのは私の主観で、だから、そう、捉えた時点ですでに、私はコピーからオリジナリティを、こう、持つようになったってことですかね。そう解釈ができなくもないですよ。

R：うんうん。

K：なるほどなるほど。

R：だって、別に一般的にもやっぱり男は強さより優しさだと、いうことだって耳には入ってるけど、

K：確かに、そういう認識もありますよね、うむ、

R：つまり、気にいったところをとってとって、

K：じゃ、、なら、コピーではないってことですかね。今の私は！

R：ふむ、、無理してないならね。

K：コピーではないんだ。。ああ、確かに、そういう考え方もあるんだ。ずっと自分を、その、男に対する価値観をコピーだと思ってたけど、息子とか、院生じゃなくて、それがコピーではないこともありうる、、お、、これは大きい発見ですね。確かに、確かに、自分が考えて、意識してたか、してないかはわからないけど、自分の判断のもとで切り取って、そのイメージを私は持っているわけですから、そこまで自分のことをコピーだと責めなくてもいいですよ。なるほどなるほど。

(後略)

ようやく、Kに光が見え始めた。光をつかんだ瞬間のKの気持ちが、R氏の言うことを

聞かずに、一人の世界で思考を急展開しているところから鮮明に見える。もちろん、その手掛かりは対話相手である R 氏から得たものであった。ここまで、K は自分が持っているイメージに自分のアイデンティティが介入していることに気がつかず、それを「模倣」しようとする自分のことをコピーだと思い込んでいた。この新しい発見で、K は自分の存在を素直に受け入れるようになり、さらなる「考える」プロセスの伸長も可能となった。そうだ。K は「男」だったのだ。

### 3. 結論

対話を終えて、録音した内容を数回聞きながら、対話前と比べると「私」により近づけた気がした。私は自分の「男」に対して、「答え」を出さなければならないと焦っていた。しかも、その「答え」にはある種の「正解」があると思いきみ、その「正解」が見えないのが不安の根本的な原因だった。「男探し」から目を逸らして、コピーとして生きていくことを選ばざると得なかったのである。しかし、「テーマ探し」を通して自分について考え、私は自分の「男」と向き合おうと改心した。私の知らない領域の「私」について考え、それを他者に伝え、また他者からの反応を受けるプロセスは決して楽な道のりではなかった。時に、自分が嫌になり、対話を止めたいと思ったこともあった。対話を望んでいる私と、それを拒否しようとする私。その相互作用の中で、対話相手の R 氏との話し合いがきっかけとなり、私の「男」が生まれた。生まれたより、「認めた」のほうが適切かもしれない。世の中には、数えきれないほど多くの価値観が言語の力を得て形として存在する。その価値観という選択肢のなかで、いくつかを選んで私は自分の「男箱」に入れているのである。従って、私の目に肯定的なイメージとして映っていて、私がそれ（木からリンゴを収穫するシーンをイメージしよう、リンゴ=いい男として私が選んだ価値観）を自分の生き方として選んだ瞬間、すでに私はコピーではなく、アイデンティティも持つ独立主体として生まれ変わったのである。

### 4. 終わりに

振り返ってみると、いろいろ悔いが残る。対話報告を通して、メンバー同士のチームワークもよくなり、もっと深い対話ができただけなのにとすると、気持ちはさらに複雑になってしまう。私は自分の問題と取り組み、それをクリアするためにこのクラスを利用した。それ自体は決して悪いことではないと思う。しかし、私がこのクラスに座っていることで、

他の参加者がもっと充実感を得るように、そして私にとってももっと意味のある時間にするために努力すべきだった。自己構築は一人ではできないものである。私の話を心から受け入れようとする仲間の存在の大切さを学んだことが私にとっては何よりも大きな収穫だと思う。それでは、私は次なる「男」を求めて対話行電車で身を乗せ、長い旅に出ます。皆さんにも神様の加護がありますように。